

## 「ニューヨーク・シティ・マラソン」 村上龍

紹介者：榎本博康

### [紹介]

ナンシーは黒人売春婦。冬になると毛皮のコートを持っていないので、ホテルに入ると警備員に売春婦とばれてしまうから、路上で震えながら客を拾う。で、同棲している僕が男娼として頑張っ稼ぐ。でも昨日ユダヤ人の客と喧嘩をして歯を折った。

ナンシーは客と2,000ドルを賭けた。50歳過ぎのオハイオの農場主が、ニューヨーク・シティマラソンで、ナンシーが勝ったら2,000ドルを呉れるという。でも僕は、ちゃんと料金の45ドルをもらった方がいいのと思った。その農場主を知っているからだ。オリンピックにもう少しで出そこなった男だ。

ナンシーは高校生の頃は5マイルの選手だった。でもそれ以来、全く走ってなくて29歳。レースまであと1ヶ月だ。ナンシーは昼も夜も朝も練習をした。煙草をやめた。魅力的になった。でもスタートの5日前に走れないと泣いたが。

ついにスタートした。ナンシーは頑張った。農場主に食いついて走ったが、勝てなかった。タイムは3時間48分52秒。五番街のハンガリア料理店で、僕と友人を交えて食事をした。ナンシーはこれを機に煙草を止めたいと思っているが、無理だろう。来年も走るか、それは分からない。

### [感想]

いよいよ21世紀だ。この時点(2000年末)で、私の所属するランニング・クラブであるフル百会楽走会(略称フル百)は、2001年の総会をアメリカで開き、ニューヨーク・シティマラソン(NYCM)に出場するという夢の実現を検討していたので、本書を選択した。その後マラソン大会はワシントンDCでのマリノコープス・マラソンを具体的に設定し、エントリーも完了していたのだが、例の9月11日のテロで、ツアーの中止に追い込まれた。会は以前、日本人旅行者などの死者を出したエジプトのルクソール事件(1997年11月)により、同じくエジプトでのマラソンが中止に追い込まれた経験があり、マラソンといえども世界の動きに連動し、また走ることが平和の象徴でもあることを再認識したのです。

いきなり書かれている「黒人娼婦の尻は汚い」との一言が、ナンシーの現状を表している。ナンシーの母親は気違い病院、父は寝たきりで、男は男娼、自分は娼婦。これで毎日路上に立ったら、尻もたるむだろう。でもマラソンを走る客との会話から、賭けと言う形ではあるが、



ナンシーはもう一度高校生の頃のように走る。その練習への打ち込み方は非常に強いものだった。賭けには負けたが、結構いいタイムで走ることができた。でもそこまでだ。ナンシーは、また明日の夜から街に立つだろう。

この小説では、残念ながらナンシーは若い頃の追憶で走ったのであり、決して現在の生活と結びつくものではなかった。現在でも走っているのは、数千頭の牛を持っている金持ちの農場主であり、そんな贅沢は貧乏人には無関係なことだ。これでは余りにナンシーが可哀想だ。

さて、2001年のNYCMは11月4日の開催であった。この執筆時点ではエントリーの心配をしていたのだが、出場枠は米国在住者枠2万人と海外在住者枠1万人があり、海外枠は直接申込者の抽選（これは非常に確率が低いと言われている）とパック旅行の二方法がある。日本のパック旅行枠は指定旅行会社5社に対して、この年は合計が最大500名とのこと。1社当たりでは50から100名だ。いずれにしても会の希望者を全員参加させるには非常にタイトだが、実はもう一つ方法がある。優秀ランナーの特別枠であり、これを使えば2000年の有森のように出場できる。できる人は試して欲しい。

NYCMは1970年に第1回を開いているが、その年は男性126人、女性1人がスタートして、完走が男性55人、女性ゼロという結果だった。翌年から女性の完走者が出て、1976年と77年には、日系のゴーマン美智子さんが連続優勝している。77年は、当時24歳の村上龍がこの小説を書いた年でもある。それが2000年には、スタートが男性23,077人、女性9,426人であり、完走が男性20,749人、女性7,433人という特大規模の大会に成長した。また女性の参加比率が非常に高い。

このNYCMを主催するのが、New York Road Runners Club (NYRRC) だ。この会は1958年に47人のエリートランナーでスタートした。なぜなら当時は楽しんで走るという考えがなかったからだと説明されている。しかし現在ではいろいろな楽しみ方のランナー達を擁して、会員数は32,000人以上という巨大ランニング・クラブに成長した。

(初稿2000. 12. 12、出版時2002年に補足)

#### [リバイバル感想]

ニューヨークシティマラソンはワールドマラソンメジャーズ(WMM)のひとつでもあり、とても魅力的に聞こえるので参加したかったが、初稿の当方で3万人、最近では5万人越の巨大マラソンであり、果たして楽しいかどうかは分からない。それでも、今では走って見たら良かったのにと思っている。良くも悪しくも経験なので。

せっかく20年の時が経過したので、[感想]の部に書いたことを少々補足したい。サラリーマン時代に海外マラソンに参加することは極めて難しかった。それでも2001年10月28日のMarine Corps Marathon (Washington DC, USA) に友人たちとエントリーをし、ツアー代金も納入した。しかし会社にはどのように切り出すかを探っていた。今考えればあほらしいのだが、立場とか周囲への影響とか、それだけでなくも足元を掬われかねない中で、難しさを感じていた。ところが全く思わぬ形で悩みは解消してしまった。

ある日、残業後に単身赴任先の住所に近い店で同僚と飲んでいると、妻からすぐにテレビを見ろという電話が。どういうことか分からないまま、すぐに帰宅してテレビのスイッチを

入れると、すぐに旅客機が高層ビルに突っ込む動画が。同時多発テロの2機目、ユナイティッド航空175便がワールドトレードセンター(WTC)南棟に突入した瞬間の生中継だった。さきの電話は1機目のアメリカン航空11便がWTC北棟に突入したことを伝えたものだった。お分かりのように、ある日とは9月11日である。今資料を見ると、両事件は17分の時間差であった。そして3機目がペンタゴンに突入し、4機目がワシントンDCに向かいつつ、旅客たちの反撃でその手前で墜落した。

そのために米国への入国審査が厳しくなり、またテロ多発への不安感もあり、ツアーは中止となった。残念なような、ほっとしたような気分であった。

いろいろな思いがあって、この半年後に私は会社を辞めて、自営業となった。もちろんマラソンが目的では無かったが、海外マラソンは年に1回くらいは行くようになり、たくさんの良い経験ができた。今では多くのマラソンの制限時間内で走ることが困難なので、国内での制限時間のゆるい大会で走っている。少しでも走れるうちに多くのレースに参加できて良かった。何によらず、できる時にやっておくべきだ、人生は短いのだから。

(2021. 8. 08)